

実践的なスポーツの社会学的学習方法における

「学習過程」の意義の検討

—2017年アジア冬季競技大会でのボランティア活動の経験を事例として—

Active learning of “Sport” through participating in the sport event as a
volunteer : A case study of Eighth Asian Winter Games in Sapporo

植田 俊¹

Shun Ueta²

要旨

本稿の目的は、実践的なスポーツの社会学的学習における「学習過程」の意義を検討することである。そのための事例として、2016年度に実施した「地域創造インターンシップB」の一貫で学生たちが行った、2017年アジア冬季競技大会でのボランティア活動の「経験」を取り上げ、スポーツの社会的理解の深化における、スポーツの「現場」にボランティアとして参与するという学習方法の可能性と限界を論じる。

Abstract

The purpose of this article is to discuss the learning processes of “sociology of sport”. In this regard, we deal with a case study of Eighth Asian Winter Games in Sapporo. And we bring out the experiences of TOKAI university students in this event. Finally, we point out potentials and limitations about the active learning of “Sport” through participating in the sport event as a volunteer.

キーワード： 経験、スポーツのボランティア、関係性、学習過程

Keywords: Experience, Sport volunteer, Relationship, Learning processes

1. はじめに—本稿の目的—

スポーツを「する」人びとを自発的に支える活動（＝人びと）を広く「ボランティア」と捉えるならば、それは現代スポーツの存立にとって、競技レベル、規模、種目、実践される場所を問わず欠かすことのできない存在（役割）となっている（二宮 2017）。また、「ボランティア」は、社会生活を送る中で何らかの形でスポーツに関わりを持つ

¹ 東海大学国際文化学部地域創造学科, 005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1 ueta@tsc.u-tokai.ac.jp

² Department of Community Development, School of International Cultural Relation, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

ていこうとする人々に求められる心構えや基本的精神としても捉えられており³、スポーツに関する知識・技能を学んでいる学生たちにとって欠かすことのできない経験・実践と位置付けられている⁴。この二つの論理が重なり合うことで奨励され、積極的に運用が推進されるようになったのが「大学(生)によるボランティア支援」であり、その授業化である。

その萌芽は、1998年の冬季五輪長野大会における信州大学の取り組みに既に見られており(北島 2016)、実際にどのように運営されているかという「実態報告」が様々な事例について積み重ねられてきた(金森ほか 2012; 金崎 2005; 窪田ほか 2009; 松下 2005; 内藤 2007; 大竹 2005; 植木 2007)。また、ボランティア経験が参加者にどのような変容をもたらすのかという視点から、教育的な「効果」を測定する試みも積み重ねられ、学生たちが得る学びの内容が明らかにされてきた(江田ほか 2003; 福山 2002; 松谷ほか 2010; 二宮 2016; 豊田・金森 2007; 岡崎 2015; 大西ほか 2010; 高見ほか 2008; 常浦ほか 2016; 山下・行實 2015)。

しかしながら、こうしたスポーツへボランティアとして参加する学生の実態や、その教育的効果に関する人文社会学的知見の蓄積については「学術的洗練化」が進んでいる一方で、スポーツの「現場」へ参与し自らの「からだ」で経験して学ぶという実践的なスポーツの社会学的学習の方法論や意義、学習環境の構築方法と成果との関連性の検討は端緒についたばかりであるように思われる。

この課題について、伊藤(2016)は自身が担当する「スポーツ社会学」の講義に、「現場」に足を運んだり「グループワーク」を導入したりする、いわゆる「アクティブ・ラーニング」的形式を導入した成果を報告している。それによれば、「変化する社会の状況を反映した身近な教材を導入すること」(ibid.,p.34)によって、「受講者に『スポーツ』と『地域活性化』との固く結ばれた関係を切り離すことができる」(ibid.,p.34)という。これは「スポーツ社会学」の講義のアクティブ化が、スポーツに対する固定化した観念を打破し、社会学的理解を促進する可能性を示唆するものである。しかし、この指摘は「学習内容」に関する意義についてであり、この意義を学生たちにもたらし、「認識の変化」を導いた学習方法とその学習成果との関連性、すなわち「学習過程」の意義についても考察を深める必要があったのではないだろうか。というのも、パー

³ 日本におけるスポーツ・ボランティアを束ねる『日本スポーツボランティアネットワーク』理事長の渡邊一利氏は、スポーツの場面のみならず日々の生活とも相通じ、「共助社会」を形成する活動としてスポーツ・ボランティア活動を捉えている (<https://spovol.net/outlines>、閲覧日: 2018年10月25日)。この「共助社会」の形成というねらいは、『東京2020大会に向けたボランティア戦略』(公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、平成28年12月)においても明確化されている。

⁴ 2020年東京五輪・パラ五輪組織委員会と連携協定を結んだ大学が、2018年9月1日現在、805校に及んでいること (<https://tokyo2020.org/jp/get-involved/university/>、閲覧日: 2018年10月25日)、また、国公立大学や高等専門学校に対して、学年暦を変更して五輪開催中の授業や試験を避けることを文部科学省に届け出なくても認められると通達し、事実上ボランティアに参加しやすくなるよう配慮していることがその証左である(『朝日新聞デジタル』、<https://goo.gl/Vixkvr>、閲覧日: 2018年10月25日)。

ソナルコンピューターやタブレットといった最新の機材や、スライドや動画といったアトラクティブな教材が活用できるようになったとはいえ、講義は通常「教室」内にとどまる形式が一般的であり、その意味で伊藤による実践的な学習形式導入の試みは、従来の型を打破しスポーツの社会学的理解を促進させる独自性が認められるからである。こうした独自の学習過程が、学生たちに従来とは異なる「経験」をもたらしたがゆえに、伊藤が指摘する学習内容の成果が得られたと考えることができる。

そこで本研究では、「スポーツ社会学」が持つ視点（学習内容）の意義を認める伊藤と問題意識を共有しつつ、その実践的学習の過程の意義について検討することを目的とする。

2. 本研究の対象と方法

2-1. 対象

本稿で検討対象とする実践的なスポーツの社会学的学習は、2017年2月18日から26日にかけて筆者が実施した『地域創造インターンシップ B』（以下、インターン B）である。本講義では、札幌市および帯広市を会場として開催された「2017年アジア冬季競技大会」（以下、冬季アジア大会）に「おもてなしボランティア」として参加した。本学「インターン B」は半期30時間（2単位）の授業で、東海大学国際文化学部地域創造学科の「主専攻科目（選択）」に位置づけられている。本講義の履修者は計38名で、履修せずに参加した学生1名と合わせて計39名の学生が参加した。内訳は、地域創造学科2年生が24名、3年生が15名であった（表1）。授業としての実施日は2月18日（土）、20日（月）、21日（火）、22日（水）、25日（土）の計5日間であった（表1）。

また、本授業とは別に、「一般ボランティア」⁵としても全員が登録して活動を行なった。学生たちが従事した一般ボランティア業務は、選手村（アパホテル）における「インフォメーションセンター」と「サービスセンター」の二箇所での業務である。この業務は午前（8:00～14:00）と午後（14:00～20:00）の2シフトに分けられており、開始15分前に現地に集合し、その日の活動内容と担当場所の指示を受け業務を行った。インフォメーションセンターの業務は、主に会場－競技場間を輸送するバス時間の案内、近隣地域の情報提供、困りごとの相談窓口などである。サービスセンターの業務は、洗濯物の受付・受け渡し、お弁当の配布、食堂前でのア krediyation チェックなどである。

⁵ ここでいう「一般ボランティア」は、授業として実施した「おもてなしボランティア」とは区別される活動である。一般ボランティアは大会実行委員会の指示のもとで行なった活動を指す。一方で、本授業で行なったおもてなしボランティアは、担当教員である筆者および企画運営を中心となって担ったゼミ生の指示のもとで行なった活動のことを指す。

2-2. 方法

本研究は、実践的なスポーツの社会的学習における「学習過程」の意義を検討することが目的である。そのために、本稿ではまず、冬季アジア大会における学生たちのボランティア「経験」を描写する。その際、大会の概要をまず把握した上で、学生たちが参画したボランティア活動の詳細を記述する。その上で、学生たちがいかなる活動から何を「経験」したのかについて、一ボランティアとして参加した筆者の「経験」も重ね合わせながら重層的に記述する。

本研究において、学生のボランティア「経験」を分析するためにボランティア活動の詳細を記述するねらいは、これまでの「スポーツ・ボランティア」研究の多くが、ボランティア活動への「参加動機」や「継続意欲」、「活動に対するイメージ」や「意識変容」に分析の力点を置いており、動機や意欲といったボランティア参加の「意識」の元手となるはずの肝心のボランティア「活動」そのものがほとんど記述されてこず、両者がそれぞれ独立して存在するかのように扱われてきたことに問題がある点にある⁶。参加した学生たちは、実際に活動することではじめて様々な考えを持つに至り、活動の意義を解釈したり、自らの「経験」を構築したりしているはずである。よって、このような先行研究の状況を踏まえる本稿は、詳細な活動の記述は「経験」の分析には不可欠のものであり、「実践報告」以上の「学術的意義」がある点と考える。

本稿で記述する学生たちの「経験」は、大会参加中に実施した対話や行動観察、意見交換などのフィールドワークから得られた情報や、本講義終了後に提出されたレポート(2017年3月13日締切)の内容および個別に実施したインタビュー内容を基に再構成した。インタビューは2017年4月から8月末の間に実施した。

3. 冬季アジア大会およびボランティア活動の概要⁷

3-1. 冬季アジア大会の概要

冬季アジア大会は、「アジア地域の冬季スポーツの振興・発展および競技力の向上」を目的として1982年に日本オリンピック委員会が中心となって創設したスポーツイベントである。1986年に第1回大会が札幌で開催されてから日本国内では3回行われており、2017年大会で4回目の開催となった。回を重ねるごとに参加国・地域、競技数、種目数、参加人数は増加の一途を辿っており(表2)、第4回目の大会規模は1972年の第11回オリンピック冬季競技札幌大会と同程度となった⁸。

⁶ ボランティア参加者の「経験」や、その質の前提となるボランティアの「受け手—為手」の関係性に着目する視点の意義については、別稿(植田俊・山崎貴史、2018、『『スポーツ・ボランティア』研究の再構成(その1) —『関係』論への視座転換—』、『東海大学国際文化学部紀要』第10巻、頁数未定、近刊)にて、これまでの「スポーツ・ボランティア」研究をレビューし「関係論」という新たな視点の可能性を提示した。

⁷ 本章の記述は、特別断りがない限り『2017冬季アジア札幌大会公式報告書』(2017年11月)および『Chefs de Mission Manual 8th Asian Winter Games Sapporo 2017』(2017年2月)に基づいている。

⁸ 1972年大会は、参加国数35、競技数6、種目数35、参加選手数1,006(男子801、女子205)、参加役員527であった(「第11回冬季オリンピック札幌大会報告書」)。

表2 大会の歴史

開催年	開催地	競技数	種目数	参加国・地域	参加人数
1986	札幌	4	7	7	430
1990	札幌	4	6	10	441
1996	ハルビン(中華人民共和国)	4	8	17	702
1999	江原(大韓民国)	4	7	21	798
2003	青森	5	11	29	1,016
2007	長春(中華人民共和国)	5	10	26	1,101
2011	アスタナ・アルマトイ(カザフスタン)	5	11	26	(786)※
2017	札幌	5	11	32	2,010

今回の札幌大会は、2017年2月19日(日)から2月26日(日)にかけて8日間にわたって行われた。競技会場は札幌市内に12カ所と帯広市に1カ所、選手村は札幌市内に2カ所⁹、帯広市に1カ所準備された。実施されたのは5競技11種別64種目の競技で、競技会場は過去に開催されたスポーツ・イベントで使用された既存施設を利活用し、新設することなく実施された。しかし、国際大会を開催するために必要な諸室が不十分であったため、改修(手稲山オリンピック関連施設)およびプレハブ等の仮施設を各競技場に設置することにより対応がなされている。選手村は、施設機能・アクセスの利便性等が考慮され「アパホテル&リゾート札幌」(南区川沿)が選定され、2017年2月16日から27日まで公式運営された。大会組織委員会の報告によれば、大会に観戦に訪れた観客数は83,612人¹⁰であった(『朝日新聞』、2017年3月10日)

⁹ 当初の計画では札幌市内の選手村は「アパホテル&リゾート札幌」(南区川沿)の1カ所のみとなる予定であったが、「南京大虐殺」を否定する内容の書籍が客室に置かれていることをめぐり問題に端を発し、中国選手団および韓国選手団が宿舎変更を求めたため、札幌市内の選手村に急遽「札幌プリンスホテル」が加わることとなった(「中国選手団の宿舎変更へ 冬季アジア札幌大会」『毎日新聞』2017年1月31日、「韓国選手団も宿舎変更 冬季アジア札幌大会」『毎日新聞』2017年2月1日)。この変更は、後述する学生の「経験」にも少なからず影響を与えた。

¹⁰ 日本政策投資銀行(2016)によれば、本大会の開催によって北海道内への波及が期待される経済効果は、来訪者の消費支出単価×滞在日数で概算される「直接効果」と、直接効果に伴う原材料等の購入や雇用者所得の増加による消費支出の増加から概算される「間接一次効果」「間接二次効果」を合わせて117億円と試算されるという。札幌市は、上田前市長の市政下において冬季五輪招致を既に正式に表明しているが、その理由は「都市のリニューアル」「地域経済の活性化」が期待されることだと当時の市長は述べている。この論理は、原田(2002)や上条(2002)に代表される「スポーツ・イベントの経済波及効果」説であり、自治体が大会を招致・開催地立候補を正当化し市民の納得(=開催賛成)を得るための強力な言説として機能している。しかしながら一方で、より高い「経済効果」を求めれば求めるほど大会規模は巨大化する傾向にあり、それが「ボランティア」を必要とせざるを得ない状況を生み出している。

3-2. 大会ボランティアの概要

大会運営を支えるボランティアの募集は2016年5月から始まった。大会組織委員会は応募数「5,000人」を目標としていた。しかし、当初の募集期限である6月末までの応募者は1,800人にとどまったため、募集期間が1ヶ月延長された。最終的には4,662人から応募が集まった(表3)。

募集されたのは「一般ボランティア」と「多言語ボランティア」の2区分である。

大会ホームページ・各種メディア・報道機関等を通じた「公募」と、大学・地域団体・ボランティア団体などへの「協力要請」の2方法で応募が呼びかけられた。

ボランティア応募者の平均年齢は40.9歳、性別割合は男性44.2%、女性55.8%。職業別割合は、学生33.5%、会社員など33.1%、主婦12.6%、その他20.8%、居住地別割合は札幌・帯広74.4%、北海道のその他16.9%、北海道外7.8%、海外0.9%であった。

ボランティアが活動した場所は、札幌市・帯広市の競技会場をはじめ、地下鉄やJRの駅の観光客向け「インフォメーションセンター」、新千歳空港など合計36カ所であった。業務内容は会場案内をはじめとする「観客向けサービス関係」、手荷物検査をはじめとする「警備関係」、「The Olympic Council of Asia (OCA)・選手団・報道関係者向けのサービス」、「医療関係」など14業務であり、それらの業務に応募者それぞれに割り当てられ、最終的には4,293人(延べ10,595人)が従事した。参加者には一仕事ごとに交通費相当分として一律1,000円分のQUOカードが支給されている。

大会当日の業務従事前に、「全体研修会」が2度開催され(2016年9月19日・20日・21日・2016年10月22日・24日・25日・30日)(表4)、ボランティア活動に必要な心構えや基礎知識のレクチャーを受ける機会が設けられた。

表3 ボランティア参加者数

区分		募集定員	応募者数
札幌	一般	3,000	2,894
	多言語	1,800	1,592
	小計	4,800	4,486
帯広	一般	100	98
	多言語	100	78
	小計	200	176
計	一般	3,100	2,992
	多言語	1,900	1,670
	合計	5,000	4,662

表4 全体研修会の日程と内容

第1回全体研修会(2016年9月19日・20日・21日)

	テーマ	説明内容
1	大会概要	大会の歴史、意義・目的を共有
2	スポーツボランティアの楽しみ方	活動にあたってのチームワークやリーダーシップ・フォロアシップ、そのためのコミュニケーションの重要性を説明(ワークショップ形式)

第2回全体研修会(2016年10月22日・24日・25日・30日)

	テーマ	説明内容
1	競技概要	大会での実施競技についての基礎知識
2	異文化コミュニケーション	海外からの観客、関係者に接するための心構え
3	アクレディテーションカード(AD)について	アクレディテーションカードの役割など
4	ボランティア活動にあたって	大会までの準備スケジュール、大会時の活動ルールなど

表5 ボランティアの経緯と現場での動き・流れ

日時		経過・現場での動き
年	月日	
2014	10.31	「2015年世界女子カーリング選手権札幌大会」のボランティア募集の案内が届く。
	12.17	冬季アジア大会式典課長が研究室来訪。カーリング選手権ボランティアの説明を受ける。
	12.22	学生にボランティア募集を伝達。
2015	3.5	希望者1名と筆者がボランティアとして参加希望を提出。学生は3日間、筆者は1日参加することとなった。
	3.11	市役所にて式典課長と打ち合わせを実施。冬季アジア大会についても意見を交換。
	3.16~18	カーリング選手権にボランティア参加。3/16→8:30~13:00(学生:観客案内業務)、3/17→13:00~17:30(学生:観客案内、筆者:アクセスコントロール)、3/18→8:30~13:00(学生:アクセスコントロール)
2016	9.9	冬季アジア大会のボランティア募集と学生の派遣について、式典課長と意見交換。選手村の「おもてなし」を学生に依頼したい旨を伝えられる。
	9.24	学科主任に許可を得て、「地域創造インターンシップB」としてボランティア活動を授業化することが決定。式典課長と連絡を取り、年明けに打ち合わせ実施を確認。
	2.29	4月に学生へ授業案内とガイダンスを実施することを決定。式典課長に報告しガイダンス内容についての打ち合わせを依頼。
	3.11	市役所で式典課長と担当職員3名と打ち合わせ。本学の授業形態と「おもてなし」の準備・進行方法等について意見交換を行う。
	4.15	第1回3年生ゼミを実施(2名)。顔合わせと1年間の活動目標・曜日時限などを確認。
	4.18	「地域創造インターンシップB」(冬季アジア大会)のガイダンスを実施。
	4.26	第2回3年生ゼミを実施。活動テーマを「観光・スポーツ開発と地域社会」に決め、5/1に二セコ視察を実施するための打ち合わせを実施。合わせて、冬季アジア大会の運営に中心となって参画することを提案し了承される。
	5.1	二セコ視察を実施。
	5.13	式典課長へ、学生の「おもてなし」の企画・運営を先導する学生が揃った旨を伝える。6/6に学生も入れて顔合わせを実施することを決定。
	5.2	第3回3年生ゼミを実施。二セコ視察の反省と今後の調査計画づくりを行う。
	6.3	第4回3年生ゼミを実施。6/6の打ち合わせの内容、時間と場所を確認。
	6.6	式典課職員の方々と打ち合わせを実施。先方より「選手村における「おもてなし」の企画・運営業務を依頼され、その案を示される。今後のスケジュールの概要を共有し、東海大学案をプレゼンテーションさせていただくことを確認。7/15にアパホテルの視察にも行くことを決定。同日、現場で打ち合わせを行うことも決定。
	6.17	第5回3年生ゼミを実施。「人文社会科学の研究的目的」についてレクチャー・ディスカッションを行う。
	6.2	式典課職員より連絡をいただき、「おもてなし」活動計画立案の進捗状況の確認とプレゼンテーションの期日を8月上旬を目処に実施することを依頼される。
	6.24	第6回3年生ゼミを実施。式典課職員からいただいた連絡内容を共有。
	7月	7月上旬に「おもてなし」企画立案の進捗状況を報告したい旨を伝達。7/4ないし7/8で調整を行うことが決定。
	6.30	式典課長より、一般ボランティアの募集状況の報告があり、集まり方が芳しくなく期限を延長する旨が伝えられる。
	7.1	打ち合わせ日程を再調整し、7/11ないし7/15で実施を依頼し調整していただくこととなった。
	7.6	式典課職員より、アパホテルの視察が7/15、13:00~15:00に決定した旨を伝達される。
	7.12	第7回3年生ゼミを実施。「おもてなし」活動の具体案を提案するように指示を出す。ディスカッションを7/14に実施することを決定。
7.14	第8回3年生ゼミを実施。「おもてなし」企画の学生プレゼンテーションを実施。東海大学案を大方決定する。	
7.15	アパホテル視察を実施。会場の設備等を一通り確認したのち、会議室で議論。先方からは2016/7/1現在の競技日程と会場図、国際プラザが企画している選手向けVIP向けの文化プログラム案を提示される。学生たちと一緒に考えた案を筆者がまとめ、会議で報告。競技運営上、現実的なもの/非現実的なもの(健康・テロ等の安全面を考慮)、施設の既存設備的に現実的なもの/非現実的なもの、「おもてなし」の目的上(日本文化の体験・経験、札幌ならではのものの提供)現実的なもの/非現実的なもの、既に他の部署で企画されている等の重なりを考慮した上での現実的なもの/非現実的なもの(アイヌ民族によるパフォーマンスなど)、競技日程上、現実的なもの/非現実的なもの、残り時間上実現できそうなもの等について議論。大方の方針・内容が見えてくる。次回会議は8月中に実施することを確認した。	
7.21	式典課職員より、競技スケジュールを参考資料として送ってもらう。これに沿って「人数が集まりやすい」時間・日程等を考慮に入れて検討することとなった(意味的には、一人でも多くの方を「おもてなし」がねらいのため)。	
7.22	第9回3年生ゼミを実施。東海大学案を精査した。活動内容を一覧表にまとめてくるよう指示した。	
7.28	本学職員と付属第四高校(当時)の教員と3名で、藻南商店街振興組理事長と面会。冬季アジア大会に関する支援を養成所、快話してもらった。	
7.29	第10回3年生ゼミを実施。東海大学案を精査し、今後の予定を確認した。	
8.3	式典課職員から連絡をもらい、同日、式典課課長が藻岩連合町内会会長に対して大会概要の説明と選手村の運営に関する説明を行ったことを伝達される。合わせて、藻岩まちづくりセンター所長へも、東海大学との連携を依頼したことを伝えられる。	
8.25	9/5に本学で打ち合わせを実施することが決定。	
9.5	式典課職員の方々と打ち合わせを実施。東海大学案作成の進捗状況を報告。某カメラ・写真メーカーが協力できる可能性があることを提案してもらう(レンチキョーシートを活用した藻南地区のマップ制作)。9/15にアパホテルで打ち合わせを実施することを決定。	
9.9	第11回3年生ゼミを実施。活動の具体的な日時案を提案してもらい、一覧表にまとめた。	
9.15	アパホテルの視察・打ち合わせを欠席する。	
9.27	3年生ゼミに、編入学生1名を受け入れ3人体制となる。	
9.28	3年生ゼミに、他ゼミから移籍する学生を受け入れ4人体制となる。	
10.13	第12回3年生ゼミを実施。ゼミの今後の予定を確認。10/20に企画の議論、10/24に商店街の試歩、10/27に計画の再検討・修正を実施することを確認。	
10.17	式典課職員の方々と打ち合わせを実施。区役所へ報告するための東海大学案の進捗状況を報告してほしい旨を伝達される。	
10.17	式典課職員の方々と打ち合わせを実施。区役所へ報告するための東海大学案の進捗状況を報告してほしい旨を伝達される。次回打ち合わせが11月上旬に決定した。	
10.19	藻南商店街振興組理事長と打ち合わせを行い、商店街ツアーの計画を相談した。非組合店も回るルートを計画することとなった。	
10.20	第13回3年生ゼミを実施。商店街ツアーの内容を検討した。コース制にすること(3コース)、学生の担当人数等(1グループに2名がつく)を検討し、案を作成した。歩く時間も決定(1.5~2.0hを想定、午前と午後2回実施する)。実施日(案)も決定(2/18(土)、2/20(月)、2/21(火))。商店の営業日等との兼ね合いで検討。後日、実際に歩き時間を計測すること、対象店舗との相談の上で計画のブラッシュアップを実施することとした。4日後の商店街試歩の集合時間等も確認した。	
10.24	第14回3年生ゼミを実施。藻南商店街の試歩を実施。所要時間が想定を大幅に超えた。	
10.27	第15回3年生ゼミを実施。試歩の反省と対象店舗の検討を実施した。	
10.31	第2回試歩を計画していたが未実施となる。藻南商店街振興組理事長と事務局長と面会し、今後のスケジュールを確認。	
11.7	式典課職員と連絡を取り、11/9に打ち合わせを実施することを確認した。	
11.9	式典課職員の方々とアパホテルにて打ち合わせ。国際交流プラザ職員およびスポンサー企業、選手村運営業務を委託されている企業の担当者とも面会。10/6時点の日程案と11/9時点の選手村内施設の利用予定・開放目的一覧が配布され検討された。	
11.14	学生一般ボランティア配置が全員「選手村」になった旨の連絡をもらう。	
11.14	式典課職員より、ステージイベントに参加する登壇者・関係者の想定人数を翌日までに連絡してほしい旨を依頼される(AD登録のため)。	
11.17	第2回商店街ツアーの試歩を実施。	
11.17	第16回3年生ゼミを実施。商店街ツアーのルート検討を行う。	
11.22	式典課職員の方々と連絡をもらい、国際プラザへの正式な業務依頼の都合上、11/25までにおもてなしスケジュールを決定したい旨の連絡をもらい、確認事項を整理する。	
11.24	第17回3年生ゼミを実施する。商店街ツアーのルート案が決定する。商店街の了承と協力してもらう各店舗にお願いの挨拶に伺うことが決定する。アイスキャンデルの点灯についても検討がなされる。	
12.1	第18回3年生ゼミを実施。選手村のスケジュールを確認。ステージイベント・アイスキャンデルの計画検討も実施。	
12.7	藻南商店街関係者、藻岩連合町内会関係者を対象に、藻岩まちづくりセンターにて説明会を実施する。筆者が報告を実施。アイスキャンデルの実施について提案・アドバイスをもらい、大学の計画は実現が困難だと判明。町内会のキャンデル担当者を紹介してもらい、改めてお伺いして計画を立て直すこととなる。	
12.8	第19回3年生ゼミを実施。前日の打ち合わせの結果を共有。2/16(入村式初日)に川沿第2町内会が、2/26(開会式)には藻南商店街が協力してくれることになった。2017/1/28・1/29が藻岩地区でキャンデル点灯が行われることになっており、そこで使用したキャンデルを取っておいでもらえることを共有した。	

2016	12.9	式典課職員の方に商店街ツアーのルートおよび現時点での計画づくりの進捗状況を報告する。商店街ツアールート内に組み込んでいた「やきいも工房」の出張販売の可否は、ホテル内が営利活動不許可のため実現は困難との見解をもらう。ボランティア係から一般ボランティアの日程調整依頼の通知(参加可能日を連絡してほしいとの依頼)が届き、学生からその内容についていくつか質問を受ける。それを受けて急遽学生全員に連絡し、決められた授業時間以外もなるべく一般ボランティアにも参加するよう指示を出す。ボランティアID証も大学に届き、配布を開始する。深岩まちづくりセンター所長より、アイスキャンdlの写真を借りる。
	12.12	式典課職員の方より連絡をもらい、次回打ち合わせを12/19ないしは12/20に実施できないか依頼を受け19日に実施することを決定した。
	12.15	第20回3年生ゼミを実施。おもてなし活動の内容を検討した。
	12.16	学生たちに一般ボランティアへのシフト登録の指示を出す。日程調整依頼の手紙自体が自宅に届いていない学生なども発生したため、メール等で原本を共有し先方に返信するように指示を出す。
	12.19	式典課職員の方々と打ち合わせを実施。準備の進捗状況の確認と未決定部部分の詰め作業を実施する。
	12.22	第21回3年生ゼミを実施。キャンdlの配置・必要な個数を確認。
2017		式典課職員の方より、ステージイベントの日程が決定した旨の連絡をもらう。
	1.6	式典課職員の方より、AD登録の期限が1/13であることを通達される(最終期限1/19)。ステージイベント出演者は関係者も含めて全て登録が必要になることを確認される。未登録の関係者に登録情報を提供してほしい旨を筆者から未登録者全員に改めて送った。合わせて、表彰式に参加するスタッフを探していることと連絡があり、大学生に参加依頼があり、急遽、ボランティアシフトの再調整を行うこととなった。
	1.12	第22回3年生ゼミを実施。アイスキャンdlの具体的な作業内容と時間、商店街ツアーの担当者・人数配置を検討し割り振りを完了させる。履修者名簿もゼミ生内で共有し、具体的な配置を検討。「商店街ツアー」に関しては、案内の際の説明内容やカンペの作成を行う必要を議論。事前に準備を行うことを決定。
	1.19	式典課職員の方より、ステージイベント登壇・関係者のAD登録が未だ完了していないことを報告され、情報収集を行う。深夜に全員分揃う。
	1.20	町内会の方々と打ち合わせを実施。トラック・車をご提供いただくことやその配置・配送の流れなどの手順・時間も確認。
	1.21	第23回3年生ゼミを実施。朝8:00～、アパホテルにてキャンdlの設置場所・形を検討するための情報収集を実施。
	1.26	式典課職員の方より、AD登録の期限が1/30まで延長されたことを伝えられ、登録者の不備箇所などの訂正などを期限までに行うこととなった。
		第24回3年生ゼミを実施。1/28、29に実施される深岩地区アイスキャンdlお手伝いに参加することを確認する。
	1.28	第25回3年生ゼミを実施。深岩アイスキャンdlに参加。アジア大会当日にご支援いただく「川治第3町内会」の支援に伺う。
	1.29	第26回3年生ゼミを実施。アイスキャンdlの雪中埋め戻しを手伝う。
	2.3	計画の中の未確定箇所の最終確認依頼を、選手村運営を担当する企業の方から連絡をもらう。
	2.7	第27回3年生ゼミを実施。大会期間中の流れを学生と再確認、未確定部分を洗い出す。
	2.8	式典課職員の方より、表彰式に参加できる学生の数ほか情報の提供を依頼される。
	2.9	式典課職員の方より、選手村内で行う「おもてなし」活動の内容のチラシを作成したとの連絡を受け、内容を精査し返答した。
		急遽、2/13、14、15の入村式に人手の提供を依頼され、リハーサルを含めて配置し直すことになった。学生スタッフ(ゼミ生)の授業日以外のボランティア担当日の確認を行った。
	2.10	選手村運営担当の企業の方より、ステージイベントへの登壇などにかかる経費の請求を依頼され、関係者に連絡する。
	2.12	式典課職員から連絡があり、2/12～15のプリンスホテルでのボランティアが人数過多のため必要なくなり「業務解除」となった旨の連絡をもらう。学生に周知する。
	2.13	第28回3年生ゼミを実施。商店街ツアーにご協力いただくお店に挨拶に伺う。深岩商店街振興組合事務局長の力も借りた。
		式典課職員の方より、ボランティアのシフト編成の状況報告を依頼される。ボランティア担当職員に学生全員のシフト配置一覧を提供してもらい、入村式・表彰式を優先した再配置を検討した。
	2.14	式典課職員の方より、入村式で使用する国家の長さ(曲の時間)を伝達された。
	2.15	式典課職員の方より、翌日の入村式のリハーサルの日程を教えてもらった。
		第29回3年生ゼミを実施。商店街ツアーの最終確認のための試し歩きを午前中に実施。お昼から「おもてなし」の最終確認を実施し、14時より入村式のリハーサルを南区体育館で実施。
	2.16	入村式本番 (①16:30～、②17:30～、③18:30～)
	2.17	入村式本番 (①11:00～、②13:30～、③14:30～、④17:30～、⑤18:30～)
	2.18	・商店街ツアー (①10:30～12:00、②13:30～15:00) ・キャンdl台座制作・設置作業 (10:00～12:00、13:00～16:00) ・入村式 (①10:00～、②13:30～、③15:30～、④17:30～)
	2.19	・開会式 ・キャンdl点灯 (19:00～21:00) ※点灯:18:30～、回収:21:00～ ・表彰式リハーサル (13:00～)
		表彰式リハーサル参加者が急遽体調不良と家庭の事情で参加できなくなり、シフトを再調整したことを報告する。
	2.20	・キャンdl片付け、雪中に埋め込み (10:00～12:00) ・ステージイベント (①17:00～17:30 深岩小学校、②18:00～18:30 naomi) ※準備13:30～ ・表彰式 (16:35～)
		商店街ツアーの各店舗紹介の文章を学生が作成した。
	2.21	・商店街ツアー (①10:30～12:00、②13:30～15:00) ・ステージイベント (①17:00～17:30 東海大学よさこい) ※準備13:30～ ・表彰式 (16:45～)
	2.22	・折り紙・商店街ツアー延長戦 (①10:30～12:00、②13:00～15:00) ←現地で急遽決定 ・ステージイベント (①17:00～17:30 OKI) ※準備13:30～ ・表彰式 (16:00～) ※14:30集合
	2.24	・表彰式 (17:30～)
	2.25	・キャンdl台座作り・設置作業 (10:00～12:00、13:00～16:00) ・ものづくりワークショップ (10:00～15:00) ・ステージイベント (①17:00～17:30 吹奏楽(東海大学)) ・表彰式 (21:05～)
	2.26	・キャンdl点灯 (20:30～21:45) ※点灯:19:45～、回収:21:45～ ・表彰式 (15:55～)
	2.27	・キャンdl片付け(午前中)
	3.2	第30回3年生ゼミを実施。大会の反省を行う。
	3.8	式典課職員の方から連絡をいただき、参加学生たちの「昼食」と交通費補助をQUOカードで一律¥1,000/1日対応してもらえることになった。従事者リストと日数等をファイルにまとめて先方に送った。その他、細かい事実確認等も依頼され(OKIの出演時間など)、返答した。
		「慰労会」の案内をもらった。翌3/9に研究出張を入れており参加が叶わないことを伝えた。
	3.9	式典課職員の方から連絡をもらい、大会の報告書作成中につきステージイベントの情報収集を行っている旨の連絡をもらう。事実確認と紹介文の添削を依頼され、返答した。
	3.16	選手村運営担当の企業の方より連絡をもらい、「おもてなし」への参加者の確認を依頼され、報告した。
	3.31	式典課職員の方から連絡をもらい、参加学生たちの「昼食」と交通費補助をQUOカードで一律¥1,000/1日に対応してもらえることになった。従事者リストと日数等をファイルにまとめて先方にお送りした。その他、細かい事実確認等も依頼され(OKIの出演時間など)、返答した。
	4.5	市役所を訪ね、QUOカードの受け取りと御礼の挨拶を実施。また、世話になった各部署の方々の異動先を訪ねるため、わかる範囲で教えてもらうこととした。
	4.6	元式典課職員の方から連絡をもらい、お世話になった担当者の異動先をお教えいただいた。同日より、全員の部署に直接御礼の挨拶に伺ってまわった。

※フィールドワーク等での経験を基に筆者作成

※「ゼミナール」の実施回数は冬季アジア大会に関わる内容のものをカウントし表記している

3-3. 学生ボランティアの概要

本稿が対象とした「地域創造インターンシップ B」で、冬季アジア大会の運営にボランティアとして参加することになった事の発端は、冬季アジア大会の前年に札幌で開催された「世界女子カーリング選手権」へのボランティア「協力要請」とそれへの参加であった¹¹。

世界女子カーリング選手権へのボランティア募集について、学生への周知方法等について組織委員会の担当者と懇談をもった時点で、「ボランティアの授業化」と「スポーツをその『現場』に参加しながら学ぶ」企画が構想された。しかし、世界女子カーリング選手権では、準備のための期日がほとんどなかったこと、大学側の受け入れ態勢が十分整っていなかったことが理由で実現できなかった。そのため、その構想は2017年の冬季アジア大会での実現を目指すことになった。

こうした経緯で実現を目指した「ボランティアの授業化」は、ボランティア応募の期間と大学の講義の「履修登録期間」との間にズレが生じてしまうことが事務的な問題点としてあった¹²。そこで、授業ガイダンスは2016年4月18日に実施し、その時点でボランティア参加者数(=履修者数)に見当をつけておき、正式な参加者数(=履修登録者数)を2016年10月の履修登録終了後に報告し、ボランティア登録を行うという方法を採用した。

ボランティア登録を行った学生数は計39名であった(表1)。学生たちは全員選手村に配置され、宿泊する選手・スタッフをおもてなす活動の企画・運営・実施および「一般ボランティア」としてサービスセンターとインフォメーションセンターの運営に従事することとなった。

活動をするに当たって、学生たちは活動内容を構想し当日の運営を取り仕切る「企画・運営班」と当日会場での準備や実施を主に担う「実施班」の二手に分かれた。「企画・運営班」は植田ゼミ所属の3年生(2016年度当時)4名で構成し、「実施班」はイ

¹¹ 2014年11月に当時の上田文雄札幌市長によって2026年冬季五輪招致が正式に表明されており、冬季五輪式典課課長の話によれば、冬季五輪開催という「目標」に向かってメガスポーツ・イベント開催の実績を積みあげ準備を進めていこうというアイデアに基づいて動いているのだという。2015年の世界女子カーリング選手権はその「最初のステップ」であり、次いで2017年の冬季アジア大会、2019年のラグビーW杯、2020年の東京五輪サッカー競技と、連続性をもって大会の運営体制を順次構築していき、2026年大会の招致に備えていくという。

ボランティア体制(募集・運営)の構築についても同様であり、札幌市民のボランティア意識や活動参加実態を把握していきながら、効率的募集方法や既存組織との連携を構築していく「ねらい」があるという。特に、スポーツ系学部・学科を持つ大学との連携構築は大きな課題(目標)の一つであり、その取り組みの端緒となったのが本学への協力要請であった。

¹² 一般市民を対象としたボランティア募集期間は、期間延長を含めて2016年5月～7月末であったが、開講学期が「秋セメスター」の本授業は履修登録期間が9月末～10月中旬と決まっていた。そのことから、当初よりボランティア応募期限内の申請ができず、参加学生数の見通しが立たないことが分かっていた。

ンターン B を履修した残りの学生および履修登録せずに参加した学生で構成した。

企画・実施したおもてなしボランティアの内容は、「商店街ツアー」「アイスキャンドル」「ステージイベント」「ものづくりワークショップ」の 4 つであり、大会期間中に急遽要請を受け実施した活動として「入村式支援」「表彰式支援」「プリンスホテルでの業務」があった。

3-4. 企画・運営班の準備プロセス

企画・運営班の活動は、2016 年の第 2 回ゼミから開始した（表 5）。3 年生のゼミナールで学習・研究を行う活動と並行して実施したため、定期開講曜日・時限以外の日時でも活動することとなった。

当初は 2 名のゼミ生で活動を開始した。おもてなしボランティアの企画は、学生たちが内容を考え、ゼミで検討し、それを「全体会議」¹³時に発表し、必要な物品や人材、活動時間・場所等、事前連絡等の周知活動の方法などを具体的に詰めていった。企画を立案していく際の「方針」は、筆者が市職員と行った事前打ち合わせおよび第 1 回目の全体会議で確認・決定した。具体的には、「札幌・北海道の魅力・文化・伝統が伝わる活動・表現・体験」をテーマとすることになり、学生たちはこの方針に基づいて活動内容を検討していった。

上記テーマに基づき、我々は選手村に滞在する選手・スタッフらに札幌市南区や北海道の地域特性や魅力を感じてもらえる活動内容にするために、積極的にフィールドワークを実施し情報収集や内容の検討を行った。特に、地元商店街を舞台とし、札幌市民の日常生活の一端を味わってもらうために企画した「商店街ツアー」の準備では、実際に商店街をくまなく歩き、店舗にできる限り立ち寄って店主とコミュニケーションをとったり、商店街振興組合の理事長をはじめ関係者へ聞き取り調査を行ったりした。他には、選手・スタッフらを選手村に迎える際と退村する際に送り出すための「アイスキャンドル」の準備においても、商店街や最寄り町内会の方々へ支援・協力を要請するために何度も交流を図ったり、イベント当日にキャンドルの設置や灯りが消えないよう維持する支援を行ったりした。

企画・運営班の学生たちは、現地での活動内容だけではなく、それに従事する他の学生たちの動き方や人数配置、業務内容や必要な道具の準備等も全て立案し計画した。そのために、選手村におけるおもてなし活動以外の活動や大会スケジュールなども同時に把握し、自分たちのスケジュールやその内容を確定させていった。

3-5. 「実施班」の準備プロセス

実施班は、2016 年 4 月に実施した「授業ガイダンス」、9 月・10 月に札幌市主催で行われたボランティアの「全体研修会」、および大会前に企画・運営班が行った「事前説明会」にも参加してもらった。活動内容や注意事項を事前に把握することが主な準備のねらいであった。しかし、組織委員会からの連絡によれば、事前にユニフォームを受

¹³ 以下、市職員および選手村運営を委託された企業の担当者らとの打ち合わせを「全体会議」、ゼミナールでの企画立案・検討およびそのための諸活動を「ゼミ」と表記する。

け取った学生は2名だけであったため、「実施班」に割り当てられた学生のほとんどは実質、事前準備をほとんど行うことなく現地に集まり、活動に従事していたことになる。本講義の企画・運営班が行った「事前説明会」では、ゼミ学生が活動上の注意事項を伝達・指導した。また、「全体研修会」の際に、ユニフォームとアクレディテーションカード（AD）が配布されており、本学学生で全体研修会に参加しなかった学生の分は一括して大学に送付してもらい筆者が配布した。

「地域創造インターンシップ B」では、活動日・担当する業務内容ごとに事前にグループに分け、集合時間をそれぞれ決めた。集合時間・場所にグループメンバーが集まった後、その日の活動内容・担当業務・作業の流れについて、企画・運営班のリーダーから説明を受けてから活動を行なった（表6）。活動内容は、企画・運営班が立てた計画を実行するための準備と運営であり、リーダーの指示を受けて行動した。

表6 授業内容と日程

2月18日	2月20日	2月21日	2月22日	2月25日
集合 (9:00) 指示・配置 (9:00~9:15) キャンدل台座づくり (9:15~12:00) 商店街ツアー受付 (9:15~10:25) 商店街ツアー (10:30~12:00) 昼休憩 (12:00~13:00) キャンدل台座づくり (13:00~15:00) 商店街ツアー受付 (13:00~13:30) 商店街ツアー (13:30~15:00)	商店街ツアー-担当学生集合 (9:00) 全員集合 (10:00) キャンدل台座撤去 (10:15~12:00) 商店街ツアー受付 (9:15~10:25) 商店街ツアー (10:30~12:00) 昼休憩 (12:00~13:00) ステージイベント準備 (13:05~15:00) 商店街ツアー受付 (13:00~13:30) 表彰式@真駒内 (15:00~17:00) 商店街ツアー (13:30~15:00)	商店街ツアー-担当学生集合 (9:00) 全員集合 (10:00) 商店街ツアー受付 (9:15~10:25) 商店街ツアー (10:30~12:00) 昼休憩 (12:00~13:00) ステージイベント準備 (14:00~15:00) 商店街ツアー受付 (13:00~13:30) 商店街ツアー (13:30~15:00) 表彰式@真駒内 (15:00~17:00)	担当学生集合 (14:00) ステージイベント準備 (15:00~16:30) 表彰式@真駒内 (15:00~17:00)	集合 (9:00) 指示・配置 (9:00~9:15) キャンدل台座づくり (9:15~12:00) ワークショップ (9:30~15:00) 昼休憩 (12:00~13:00) キャンدل台座づくり (13:00~15:00) ステージイベント準備 (14:00~15:00) 表彰式@真駒内 (19:30~21:30)

4. 学生たちの「経験」

これまで、「地域創造インターンシップ B」で参加した冬季アジア大会およびボランティア活動の概要を示してきた。本節では、上記活動に参加した学生たちが、どのような出来事からどのような「経験」を獲てきたのかを、準備から実施までの一連のプロセスに参加しながら行ったフィールドワークと活動後に提出されたレポートの記述および個別に実施したインタビューの結果から再構成していく。学生たちがレポートした冬季アジア大会ボランティアの「経験」を、1) 企画・運営班と 2) 実施班の2つに分け、それぞれの立場の a) おもてなしボランティアの経験と b) 一般ボランティアの経験について見ていく。ほとんどの学生が「いい経験だった」「楽しかった」と率直に報告してくれたが、ここでは、どういう意味で彼らにとって「いい経験」となったのか、その具体的内実にそれぞれの立場の違いを踏まえて迫っていく。

ところで、本学学生は全員が「選手村」に配置されたのだが、担当した業務の違いなどから、学生たちの意見に同じ出来事やテーマに対して矛盾するような「考え方」「捉え方」があることが分かった。以下ではなるべくその「矛盾」もありのままに描き、

同じ出来事がいくつもの「経験」となっていくことを明らかにする¹⁴。

4-1. 企画・運営班の「経験」

「他人ごと」から「自分たちのテーマ」へ

企画・運営班の「経験」の固有性は、約1年にわたった「準備のプロセス」に根をもっている。2016年4月15日に行った第1回ゼミにて、冬季アジア大会における選手村でのおもてなしボランティアを本ゼミのメンバーで企画し実施することを伝えた際には、どんな活動をするのか全くイメージが湧かなかったようで、「とりあえず先生の言うことに従っとけばいいと思っていた」（学生27）し、「なんだかんだ言って先生が色々やってくれるんだろうと『軽く』思っていました」（学生35）。当初は、別の主題（ニセコ町調査）に優先的に取り組んでおり、調査計画を立てるための予備調査で現地を訪れたり、既存の調査・研究を調べたりしていたため、冬季アジア大会は「正直、頭の片隅にもなかった」（学生27）。そんな位置づけでしかなかった冬季アジア大会への捉え方が、市役所の担当者との第1回打ち合わせと懇親会で一変する。

おもてなしボランティアの企画・運営に携わるメンバーの顔合わせを目的とした会合が、加藤・伊藤ビルに設けられた組織委員会本部で6月6日に実施された。それに参加した学生は、市役所の内部に入るのがその時初めてだったようで、組織委員会の様子を目の当たりにし「スポーツの裏側がみれたことに感動」（学生27）しつつも、「何かとんでもないことに関わることになってしまい若干後悔した」（学生35）と当時は不安な気持ちを抱えていたようである。会議では大変緊張した様子を見せており、一言も喋らず終わる打ち合わせが何度も続いた。

しかし、そうした緊張も7月14日のゼミでの企画検討、7月15日の全体会議・アパホテルでの現地視察を経て実際の活動イメージが徐々に構築されていくに従って、またゼミおよび全体会議での議論・報告を何度か積み重ねていくと次第に解消されてい

¹⁴ 今回の授業では、ボランティア活動を行うにあたって事前ガイダンスの際に「本授業の目的」を学生たちに伝え、レポート課題も事前に明確にした上で様々な活動に参加するように指導を行なった。そのため、学生たちがボランティアの「現場」で目にしたり耳にしたりした出来事の中で「記録に残そうとした出来事」に限定がかかったと思われる。しかしながら、それは、学生たち自身が実際に触れた「事実」を自分の都合のいいように歪曲して捉えたり、不都合な「事実」を捨象したりするよう指示したのではない。そうではなく、参加する前に予め『ボランティア』に対する自分の考え・イメージをまとめさせ、実際に「現場」で活動することで獲た「経験」と照らし合わせて振り返ってもらうことを企図して学生たちに求めたのである。いうなれば、実際の経験に基づき自分の考え方を相対化するという作業である。

ガイダンスで伝えた本授業の目的は、『スポーツ』が存立する仕組みを現場で学ぶことおよび『スポーツ・ボランティア』に対するこれまでの自分の考えを再考することの二点であり、事後レポートの課題は「ボランティアに参加してみて学んだこと、何か変だなと気が付いたことなど、今回参加して獲た自分の『経験』について、『スポーツ・ボランティア』に対する自分の考えと比較しながら報告しなさい」であった。

く。また、学生たちの提案内容も変化していく。当初は、活動アイデアを思いつくままにリストアップしていたが、活動の「実現可能性」や「選手・コーチに喜んでもらえるようなもの」という点を考慮できるようになっていった。7月22日のゼミでの検討の際には、「参加国の選手・コーチ・スタッフ数は具体的に分かるか？（分かるようになるのはいつか？）」「何月何日にどの国の選手・コーチ・スタッフが選手村入りするのか？」「選手村が貸し切りになるのはいつ（何月何日）からか？」「『おもてなし』活動を行うことができる時間はいつか？（9:00～21:00？）」といった疑問点を自分たちでまとめ、企画内容を詰めていくに当たって、組織委員会に確認したい事項として、のちの全体会議の際に学生たちが自ら提案していた。こうした出来事から、大会や関係者との関わりが回数を重ねて深まっていくにつれて、学生たちにとって「冬季アジア大会」が、「他人ごと」から「自分たちのテーマ」へと変わっていったことが理解できる。

座学での学びに与えられる「具体的内実」

このように、おもてなしボランティアの企画が「自分たちのテーマ」になっていくプロセスをさらに後押ししたのは、学生たちと一緒に実施したフィールドワークや現地踏査の「経験」だった。既に述べたように、おもてなしボランティアの企画は前提となる「方針」を踏まえて立案され

表7 「商店街ツアー」のルート

コースA	時間		コースB
	①	②	
アバホテル	10:30	13:30	アバホテル
川沿湯 ※20日(月) なし	10:40	13:40	セブンイレブン
安齋豆腐	10:50	13:50	Qコーヒー ※21日(火) なし
defi ※20日(月) なし	11:00	14:00	道新いぬい
工藤時計	11:10	14:10	ポワンダプリーム
マルゼルブ	11:20	14:20	藻岩神社
カキツバタ ※21日(火) なし	11:30	14:30	カキツバタ ※21日(火) なし
藻岩神社	11:40	14:40	マルゼルブ
アバホテル	11:50	14:50	アバホテル

※敬称略

た。フィールドワークを実施した最大のねらいは、商店街・各個店の歴史や今後の意向、大会への期待などを把握し企画内容に活かすことにあった。学生たちにとってみれば、日々通うキャンパスと同じ地域にありながらほとんど関わりをもってこなかった商店街（の方々）と実際に触れる機会となったようである。

特に、準備に最も時間をかけたのが「商店街ツアー」である。この企画は、当初から実施が提案・検討されていた。10月24日に最初の試し歩きを実施し、藻南商店街にあるお店を大方把握するとともに徒歩移動にかかる時間を記録した。コース案は「方針」に沿って選手・スタッフらに「日本や札幌の地域的特徴を味わってもらえる店舗」であること、また藻南商店街振興組合理事長への聞き取り結果から組合の振興・加盟促進を目的として「非加盟店」も回ることにした。その上で、上記条件に合う店舗・施設をリストアップし、実施予定日および各店舗の定休日や繁忙時間等を勘案し、2コースを設定した（表7）。

「商店街ツアー」を担当する学生メンバーについては、企画・運営班の学生たちが実施班に割り振った学生たちの個々人のパーソナリティや友人関係などを勘案して担当を決定した。また、実際のツアーで使用する店舗説明の内容や道中のコミュニケーション内容は、あらかじめ説明文章を作成し、それを学生たちが英語訳して準備した。

説明文を準備するに当たって、対象となる店舗が来客に「アピールしたいもの」「お店の“ウリ”」「お店や商店街について知って欲しいこと」を把握するために、事前に各店舗にヒアリングを実施し、得た資料を元に説明文を作成していった。こうした検討および試し歩きを繰り返し、最終的には大会直前の2月13日まで準備を行い万全の体制を整えていった。

また、2月18日の「開会式」および2月26日の「閉会式」の日に合わせて、選手をキャンドルの灯りで「迎え」、「送る」ために企画した「アイスクャンドル点灯」の企画においても、企画・運営班の学生たちは川沿第3町内会・藻岩連合町内会、藻南商店街振興組合をはじめとする地域組織との関係を深め、地域の方々と一緒に段取りを行った。学生たちが連合町内会会長および藻岩まちづくりセンター所長に計画案を提示した際には、自分たちの計画が実現困難であることを指摘された。そこから大幅な見直しを余儀なくされたが、合わせてイベント実現に向けて協力を要請すべき地域の方々を紹介してもらったり、関係をつないでもらったりもした。大会で使用したキャンドルは、1月28・29日に実施されたアイスクャンドルのイベントで使用したものを雪の中に保存してもらい、当日地域の方々の手を借りて掘り起こし、ホテルまで運搬して設置するという方法をとった。1月28・29日のイベントの準備・運営・撤去（雪埋め作業）にも参加し、28日には学生たちはキャンドル設置のレイアウトを担当する機会も得た。こうして、冬季アジア大会当日の作業イメージ（必要個数や所要時間、キャンドルの見え方などの確認）が可能となった。

このような「経験」を振り返って、ある学生は「ようやく先生が授業で言っていた『地域』の意味がわかった気がする」（学生29）と語った。もちろん、数ヶ月の準備期間の中で「地域」を理解しきることは大変むずかしい。彼らが目にしたのは「地域」のごく一部に過ぎない。よって、彼らは「地域を理解した」というよりもむしろ、『『地域』理解を深めることのできる入り口に立てた』と捉えるべきであろう。言い換えれば、「地域とは何か？」という問いを持ち、その解を自ら探求しようと「構え」られるようになったということであろう。とはいえ、学生たちがいうように、実際に現地に自分で足を運び、現実を自分の目で見たり耳で聞いたりしたこと、実際の地域の現場で動いている「組織」やそれを担う人々と直に触れ合ったことで、大学の講義を通じて頭の中で概念化してきた「地域」という言葉に内実が与えられたということもまた事実であろう。

また、町内会行事を一緒に行った「経験」について、他の学生は「高校時代になんとか見かけたことのあったイベントが何をやっていたのかが分かり」、「このイベントを実施するのにどれだけ苦労しているのかが理解できた」（学生35）という。実際に「現場」に足を運んで行った情報収集は、経験を積み重ねることで学生たちの「地域」理解を深める経験となったと理解できる。

想定外の出来事の再解釈

このように、約1年にわたって準備してきたおもてなし活動であるが、いざ始めてみると「商店街ツアー」には当初想定していたように参加者は集まらなかった。初日の2月18日はキャンドルの台座づくりに協力しながら受付で申し込みを待った。しか

し、参加希望者は現れなかった。2日後の2月20日は初日に悪天候等で開催できなかった際の予備日に設定していたが、初日が参加者「0」であったことを踏まえ、予定を変更して実施することにした。しかし、参加を想定した選手・スタッフに広報ができておらず情報が伝わっていない可能性が浮上した。選手村を運営する企業が事前に催し物情報をまとめたチラシを作成していたにも関わらず、配布ができていなかったことが判明したためである。急遽、企業が作成した英語版のチラシを印刷してもらい、それを持って直接情報発信と参加案内を実施した。拙い英語での説明ではあったものの、イベントに関心を寄せ、耳を傾けてくれる選手・スタッフは多かったが、結局その日も参加希望者を集めることはできずに終わった。翌日2月21日は「商店街ツアー」実施日であったので、これまでの反省を生かし、まずは選手・スタッフを惹きつけることを目論み、受付で「折り紙」体験会を急遽開催した。すると、多くの選手たちが集まってくれたので、折り方をレクチャーしながら「商店街ツアー」の紹介も同時に行った。しかし、時間の都合や外を歩くことによる怪我などのリスクを理由に、参加者を集めることはできず、学生たちの準備の努力も虚しく「商店街ツアー」は3日間を通じておもてなし活動として実現できなかった。その結果について企画・運営班の学生たちは、

「商店街巡りは一番準備に時間をかけてメディアも動いたのに参加者がこなかったのは残念だったし、参加者側の気持ちまで考えられていなかったと感じました」(学生35)、

「様々な国の人に声をかけて回ったが、試合直前や外が寒かったこともあり、一時間ほど歩いて商店街を周るのは脚に負担がかかるという人もいて、参加する人がいなかったのかと思う」(学生34)

「当初予定していた商店街ツアーの人气が思ったよりもなく参加者が集まらなかったのは残念だった」(学生29)

というように、残念な思いをもちつつも自分たちの企画の詰めが甘かったと彼らは解釈していた。準備がしっかりしていないと企画が想定通りの「成果」をあげるとは限らないことを実感したようである。しかし、より重要なのは、彼らが「想定外の結果」について、結果の中身ではなく結果を生んだプロセスに目を向けていることである。筆者とともに地域の会議や試し歩きに最も参加した学生は、「やっぱり一番時間をかけて計画を立てた商店街ツアーがやれなかったことが心残りですが、何回も下見をしたし、商店街の人たちとの触れ合いもあって、初めてあんなに南区の商店街をじっくりと探索したと思います」(学生27)といい、経てきたプロセスを意義づけている。彼らにとっての「商店街ツアー」は、当日参加者が「0」であったことも印象に残る出来事であったものの、それよりも準備のプロセスでの出来事がより重要な「経験」として蓄積されたと考えられる。

自分たちに“代え”はいない

「商店街ツアー」は、計画こそ予定通りであったが結果が想定外となった出来事で

あった。本講義中には、計画そのものに想定外の変更が加わる出来事も学生たちは経験している。それが、「表彰式」および「入村式」の2業務である。

「表彰式」業務は、組織委員会が依頼していたボーイスカウトとの調整が不調に終わったため、1月6日に急遽組織委員会から依頼され東海大学で請け負うことになったものである(日程は表1、依頼の経緯は表5)。業務内容は、真駒内アイスアリーナにてスケートの「ショートトラック」「スピードスケート」「フィギュアスケート」「アイスダンス」「ペアダンス」の表彰式にてメダリストの国旗を専用の掲揚ポールに結びつけて国歌に合わせて挙げ、終了後に回収して戻る、というものであった。

業務内容そのものは特殊な技能を要求されるものではなく、決して困難ではなかった。しかしながら、問題はこの業務依頼が学生の業務割り振りが既に完了していた所に届いたことである。そのため、再度調整した上で担当者を決定する必要が出てきた。表彰式は競技が終了する夕方以降の時間に集中しており、かつ学生たちは追加業務による負担を引き受けなければならない上に、さらには選手村から真駒内のアイスアリーナまで移動しなければならない手間もかかるため、企画・運営班の学生から実施班の学生たちに何度も募集をかけ、個別に参加依頼も試みたが敬遠され、結局、引き受け手は直前まで見つからなかった。そこで、最終的な人数不足の分は企画・運営班の4名で請け負うこととなった。

「体調不良とか、色んな理由があったのは分かるんですけど、でもそんなに簡単に離脱されて、その分俺らだけが出なきゃいけないのはホントおかしかったすよね?でも、そこで自分らが断ったら代替りの人いないから、自分らが出るしかないってなるじゃないですか」(学生27)

「直前に依頼してくるって、今までどんな準備してきたんだ?ってホント訳分かんないっすけど、Kさん(組織委員会の担当者)に“行けない”って拒否したらどうだったんすかね?(筆者注:拒否しないけれど)」(学生35)

「まあ、急な話で引き受けるとしたら私たちしかいなかったかなって」(学生34)

「俺らが行ったらそれで成立する(筆者注:人数が賄える)って分かってたんだから、誰か名乗り出てくるの待ってもムダそうだったし、俺らで行った方が早いって」(学生29)

表彰式への参加打診があったのは1月6日であり担当者を検討する時間的余裕があったが、「入村式」に至っては、支援依頼が来たのは2月9日であった。業務内容は、入村した国の国歌に合わせて国旗を掲揚する作業の担当で、表彰式同様、決して難しい業務ではなかった。この業務依頼の問題は、本授業開始前の2月13日・14日・15日のリハーサルにも参加した上で16日・17日・18日に実施される本番に参加してほしいという点にあった。依頼を受けた時点で最初の業務日(2月13日のリハーサル)まで4日しかなく、その時点で実施班の学生へ打診する時間的猶予もほぼ無かったことも問題であった。企画・運営班の学生たちは、依頼を受けた当初から自分たちで引き受ける以外の選択肢は考えにくかったようであり、2月12日までに担当時間・国の分配を決定し、筆者を通じて組織委員会に担当者についての伝達を終えている。

長い時間をかけて「おもてなし」を準備してきた彼らは、冬季アジア大会のボランティア活動における自分たちの位置づけを、他の履修学生たちとは明らかに異なるものとして認識し、行動していたといえる。その位置づけとは、いうなれば「代えがきかない存在」である。自分たちは他の学生の代わりになるが、他の学生は自分たちの代わりは務まらないという捉え方である。この考え方は、おもてなし活動を企画・準備のプロセスに関わるという、活動そのものの「代えのきかなさ」を「経験」したからこそ、湧き上がったものである。つまり、スポーツ・イベントが存立するために必須の(=代えのきかない)活動を担った学生たち自身が、大会運営における自分たちの自身の立場を「代えがきかない存在」として捉えるようになったと理解できるのである。

しかし、こうした「誰も行けないならば立場上、自分たちが行かないわけにはいかなかった」という思いの裏には、学生 27 や 35 が率直に述べていたように、「自分も決まらずに行きたい訳ではなかった」という思いも伏在していた点は指摘しておく必要がある。ボランティア業務の「内容」は誰にでも開かれたものである。だが、それを「引き受ける」ことは年齢や職業といった「客観的属性」や、社会貢献への意欲や心的報酬といった「個人的動機」に基づく行為では決してないだろう。むしろ、その行為は様々な「経験」の積み重ね、そのプロセスの中でつくられていった「関係性」の所産と捉えるべきものである。

4-2. 実施班の「経験」

一方で、上記「企画・運営班」が立てたおもてなしボランティアの企画を実行するために準備と運営を担ったのが「実施班」の学生たちであった。実施班の学生たちは、基本的に企画・運営班の学生たちをリーダーとして、彼らの指示を受けながら活動に参加した。実施班の学生たちが主体性を発揮して活動できたのは、「商店街ツアー」の3日目に実施した折り紙体験のみであった。企画・運営班が指示の「出し手」であれば、実施班は「受け手」と言え、両者は同じ現場において同じ活動に参加していても、全く異なる見方で出来事を捉えていた。そうした異なる立場や捉え方は、積み重ねられる「経験」に違いをもたらしていた。以下では、指示の「受け手」から見たボランティアの様相を、フィールドワークと事後レポートから再構成していく。

現場における固定化された関係性とその帰結

学生たちのレポートやインタビューの中で最も多く語られたのが、「待機時間が多かった」ことであった。この指摘は本授業に対しても、一般ボランティアに対してもなされた。

例えば、本授業の1~3日目に実施を計画した「商店街ツアー」では、担当した学生たちは参加希望者が現れるまで待機していることがほとんどであった(表6)。こうした状況について実施班の学生たちの多くは、どんな活動をすべきか具体的な「指示がなかった」ために時間を「浪費」することになったと捉えたようである。

「選手は、話を聞いてくれましたが一回もツアーができなかったのもとても残念

でした。その間、暇な時間が続くことが多くだらだらとしてしまいました」(学生 21)

「自分も含め他の生徒たちも何をしていいかわからない状況でした。なので、もっと具体的な作業を与えらるともっと積極的に行動を起こすと思います」(学生 11)

「東海大学で集まった時にやる事が無く暇な時間を過ごすことが多かったかなと感じました。もっと、効率よく配置をしたほうが良いと思いました」(学生 3)

ステージイベントの準備でも、当初想定していた活動時間よりも大幅に短縮されたり、想定以上の選手たちが食堂に滞留していたために予定していた準備開始時間が遅れたりしたことが、予定外の待機時間を発生させることになった。その出来事が学生たちに「暇な時間が多かった」という印象となって積み重なっていったと考えられる。

しかし、こうした状況は、授業中に発生した想定外の出来事に起因するものであったが、学生たちは一般ボランティアでも同様の状況を経験したようである。

「以前、札幌マラソン大会のボランティアに参加したときより、楽だと思いました。しかし、今回のボランティアは一回の時間が長く、やる事がなくなって、待ち時間が多くなったりして解散になることもあり、自分としてはいまいちボランティア活動ができたのかな？と疑問に残ることが多かったです」(学生 13)

「率直な意見は、本当に暇だったし、もっといろんな仕事をしてみたかったなと思った。もっといろんな人と話をしたり聞いたり、一緒に仕事したりたくさん交流を深めたかった」(学生 33)

「“どこどこに行ってくれ”と言われて行ったら仕事はない、ということが何度もあった。実際、アパホテルからプリンスホテルに仕事に移ったとき、指示を出す人がバラバラ、言っている事もバラバラで、自分は“外に立っている”と言われて 1 時間以上立っているだけだった。ボランティアをしていて、上層部は『わかっている人間だけ動いていけばいい』という感じで動いていると思った」(学生 22)

「東海で集まってやる日じゃない時、指示をしてもらえず、どこに行き何をするのかが全く分からず困りました。同じジャンパーを着たおじさんも、私と同じ考えだったらしく、怒って帰ってしまったのを見ました。ボランティアを募集しているなら、仕事や指示などをもらえないとダメだなと思います」(学生 14)

一般ボランティアや実施班での活動は、企画・運営の担当者(筆者のゼミ生/大会実行委員)から指示を受けて行われた。そのため、彼らが持つことができた関係は、指示の「出し手」である企画・運営班の学生ないしは、一般ボランティアを管理・運営する担当職員に限られていた。よって、何らかの事情で業務が無くなれば、それにとまって活動の指示も無くなる。その結果、「待機」や「指示なし」状態が起こったと考えられる。実施班のみならず、一般ボランティアを経験した企画・運営班の学生たちからも、「特にやる事がなかったのにあんなにボランティアを配置させる必要はあったのかと疑問に思います」(学生 29)と言った声が上がっており、活動時間が少なかったことは「企画・運営側の失敗」と捉えられていた。

その一方で、「活動時間の少なさ」を別の視点から理解した学生もいた。例えば、「入村式」を経験した学生は、「それ（筆者注：活動時間の少なさ）は裏を返せば、運営がうまくいっているということ」と捉えたという。期間中、ニュースになるような大きな問題はなかったことから、今大会は円滑に進行していたと考えることができ、「リスク管理や予定管理をしっかりとできていたのだと思います。その結果として、私たちのようなボランティアの作業量が少なかったのだ」（学生 37）と思ったという。同じく「入村式」を経験した他の学生は、「自分たちはほとんどの時間が待機で仕事がなかったのは、働いている人たちがものすごく仕事をしているからなんだと感じた」（学生 33）と述べた。彼らのように、活動時間が少なかったことを「大会運営の成功」と捉える視点が生まれるのは、予め決まっていた進行計画上に「休み時間」が組み込まれており、その想定通りに進んだため待機時間が長かったとしても学生たちは疑問を持つことはなかったのではないかと推察される。とはいえ、入村式の業務においても、運営する企業と学生との間には指示の「出し手—受け手」関係が固定化されていたことに変わりはない。だからこそ、実施班や一般ボランティアでの「経験」は、指示の「出し手—受け手」関係を前提とした出来事に限定されてしまい、その間で発生した出来事のみでボランティア活動の経験が評価されてしまうことになる。

個人化されていくボランティア経験

実施班や一般ボランティアでの「経験」が指示の「出し手—受け手」関係を前提とした出来事に限定されてしまうことによって、学生たちの「経験」はますます個人的な感覚やスポーツイベントのボランティアに限らないものに引き寄せられていく。その一例が、英語への関心である。

「すらすらと、英語を話していて、純粋に格好いいと思いました」（学生）

「英語を話せたり、ほかの国の言語が話せたりと自分の成長の糧として参加している人がいて、すごいなと思った」（学生 4）

「英語が話せたらどこでも仕事ができるなんて正直信じてなかったですが、ボランティアをやりそれが肌で実感できた」（学生 2）

「かたことの英語だけでも外国人の選手とコミュニケーションが取れるんだなっていうのも実感しました」（学生 23）

「選手は英語で話しかけてくるのに自分は英語が少しだけ聞き取れたとしても話す能力がないので結局英語を話せる人に頼ってしまって何もできないということが多かったです」（学生 18）

「様々な場面で英語のコミュニケーションを取ることができ、改めて自分自身の語学力のなさを感じ、更に英語を学びたいと思った」（学生 12）

学生たちは、選手村で一緒に活動した他の一般参加のボランティアたちを見て、「英語を自由自在に使いこなせること」に率直な憧れや羨望を抱いていた。こうした学生たちは、ボランティア経験の前から抱いていた個人的な「願望・期待」と照らし合わせて目の前の出来事を自分の印象として捉えている。「英語を話せる人がかっこいい」

という個人の感覚に則った捉え方をしている者もいたが、むしろ多くの学生は、一緒に働くボランティアを個人的に目の当たりにすることで初めて上記の「経験」を得たと考えられる。冬季アジア大会が「国際大会」であったことが英語への関心を生む前提ではあるが、しかし、国際的なイベントや活動は冬季アジア大会に限られた特徴とはいえない。スポーツ以外でも経験可能なものである。いうなれば、その経験は「遍在する」ものである。

しかしながら、学生たちが目の当たりにした多言語ボランティアの存在は、選手村運営において「代えのきかない存在」として彼らの目に映ったとも捉えることができる。「語学力」という、自分にはない能力によって切り開かれていくコミュニケーションや担当可能な業務の幅が拡張していく様子と、学生が担当した業務とを自分で比較し、その違いや「差」を捉えたことで、さらに一般ボランティアが現場にて固定化された関係性に置かれていることを「からだ」で感じ取ったと理解することができる。この経験は、学生たちに自分たちが担った業務が「誰でもできるもの」であり、それを担当しているボランティアとしての自分は「代えのきく存在」であることに気づかせるのである。

よって、ボランティア現場における固定化された関係性は、学生たちの経験を「個人的なもの」や「ありふれた」ものに限定してしまうと言えるだろう。これは「ボランティア」が活動を通じて得られる「経験」の固有性や構築されていく関係性の独自性ではなく、「業務内容」によって捉えられ実際に運用されてしまっていることを意味する。ボランティアが「業務内容」である限り、誰にも開かれたものである必要があるため、「活動プロセスの固有性」ではなく、誰でも担うことができるという「役割の汎用性」が追求されていくことになる。よって、一般ボランティアに参加した個々人の経験は画一的なものになると考えられる。いうなれば、一般ボランティアとは「代えがきく」ことによって特徴づけられるものであり、そのような捉え方を学生たちがしたがゆえに、学生たちから「責任感」や「当事者性」が失われていくのである。

このような特徴が「ボランティア」にあることの証左が、大会期間中の無断欠席や遅刻、直前の業務キャンセルなど学生たちの参加態度や振る舞いに現れていた。例えば、学生たちの授業の出席状況をみると、2月18日は欠席者6名（部活動3名、他ゼミの活動1名、無断欠席2名）、2月20日は欠席者5名（家族の事情1名、無断欠席4名）、2月21日は欠席者5名（家族の事情1名、無断欠席4名）、2月22日は欠席者4名（体調不良1名、家族の事情1名、無断欠席2名）、2月25日は欠席者9名（体調不良2名、家族の事情1名、部活動1名、就活1名、無断欠席4名）であった。このような状況に対して、参加していた学生たちからも以下のような指摘があった。

「役割が明確にされている訳ではなかったからか、時間をもて余してしまったり、勝手に休んでしまったりする人も少なくなかったと思う。勝手に休むのは責任感に欠けるし、時間をもて余し自分のやりたい事をしているのは協調性がないと思う」（学生20）

「集合時間に遅れてくる人や当日欠勤が気になりました。運営側や先生はその日に必要な人数、業務内容を考えて設定しているので自分も含め、時間に厳しくな

るべきだと思いました」(学生 31)

5. おわりに——ボランティア参画の可能性と限界

本研究の目的は、実践的なスポーツの社会学的学習における「学習過程」の意義を検討することであった。そのために、筆者が 2016 年度に実施した『地域創造インターンシップ B』において実施した、冬季アジア大会へのボランティア参画を事例として取り上げ、それに参加した学生たちがいかなるプロセスを経て何を「経験」したのか(学習過程)を記述してきた。最後に、スポーツの「現場」にボランティアとして実践的に参画することがスポーツの社会学的学習においても意義と限界について考察したい(表 8)。

学生たちの「経験」は、冬季アジア大会との関わり方で大きく異なっていた。企画・運営班の学生たちは、長い期間をかけて選手村のおもてなし活動の準備に携わっていく中で、大会運営において自分たちが「代えのきかない存在」であることを認識していった。それは、大会が存立するには、運営に必要な固有の業務を担う様々な人々と関係を築いていくことが不可欠であることを認識していったと捉えることができる。冬季アジア大会のおもてなし活動の場合、それは地元地域組織との関係であり、組織委員会のメンバーたちとの関係であった。これら固有の関係性が、地域への理解を深めたり気づきをもたらしたりした。また、大会運営にとっての自分たちの位置を「代えのきかない存在」として認識させ、様々な主体的行動を取らせたと理解することができる。いうなれば、ボランティアとは、「自主性」「公共性」「無償性」といった諸特徴を持つ活動内容ではなく、その固有性は活動の根本にある「関係性」にこそ裏付けられるもの(本質をもつもの)であることを、現場において自分の「からだ」を通じて学び得たと理解することができる。

その一方で、実施班の学生たちは、活動における固定化された指示の「出し手—受け手」関係に基づいて受身的にしかボランティアに関わることができず、画一化され限定された「経験」しか積むことができなかった。そのために、ボランティア活動を通じて得られる経験は「個人的な関心事」ととどまり、自分たちにはない専門的な能力によって「代えのきかない存在」として役割を担う他のボランティアと自分を比較することで、さらに自分たちが担っている業務やそれを担当するボランティアそのものが「代えのきく存在」であることに気づいていく。

このことは、実施班のみならず、一般ボランティアとしても業務に従事した企画・運営班の学生たちも気づいていた。この経験が、スポーツ・イベントにおいてボランティアに割り当てられ任されている業務があくまでも大会が存立するために必要な業務のごく一部であり、それが一般的に「ボランティア」と呼ばれ、人々が動員されていることを学生たちは学び得ていくのである。よって、彼らはボランティア活動を「良い経験」と語る一方で、ボランティアの運営に対して批判的な目を向け、その印象を語ったのだと理解できる。その意味で、ボランティアとして大会に参画することそのものは、固定化された関係性の中で「代えのきく存在」としてしか位置づけられず、限定された「経験」しか積むことができないという限界を抱えているといえる。

しかし一方で、そうした経験はスポーツそのものを批判的に捉える「構え」を醸成

するとともに、「なぜこのような問題を抱えながらスポーツ（・イベント）は存立しているのだろうか」という新たな探求的問いを学生たちに惹起させることになるだろう。その意味において、ボランティアとして実践的にスポーツの「現場」に参画し、自分の「からだ」を通じて学習していくプロセスは、スポーツの社会学的理解へと学生を導く可能性をもつものであり、それこそがこの学習過程の持つ可能性といえるだろう。

よって、こうした学習環境をいかに設定できるかが、学生たちがどのような「経験」を蓄積するかを左右する重要な要素であるといえる¹⁵。そのためには、学生たちをはじめとして、ボランティアに参画する人々が、現場でどのような関係性の中に身を置き、そこでどのような「経験」を蓄積していくかを検討することが重要な課題となる。すなわち、我々がいかにスポーツの「ボランティア」の現実を理解できるか、そして深度を高めていくために研究を積み重ねていけるかが大前提となるだろう。

表8 ボランティア参画という実践的なスポーツの社会学的学習方法の可能性と限界

	一般ボランティア	おもてなしボランティア	
		企画・運営班	実施班
可能性	ボランティアの批判的把握	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの本質的理解（ボランティア＝関係性） ・ボランティアの一般的理解に対する批判的視点の獲得 ・既得知識の深化 ・多様な関係性構築の可能性 	ボランティアの批判的把握
限界	<ul style="list-style-type: none"> ・経験の限定化 ・関係性の固定化 ・責任感と当事者性の欠如 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習環境の設定 	<ul style="list-style-type: none"> ・経験の限定化 ・関係性の固定化
備考 (活動上の課題など)	<p>【ボランティア登録まで】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題：履修登録期間との調整（学年暦との兼ね合い）、事前の計画づくり・準備の負担の大きさ（教員の業務負担の分散、協力者の確保←活動全体を通じて） <p>【個別の企画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題：情報の周知方法の検討（集客のための）、関係各所との事前調整、時間的余裕をもって準備に取り組むこと（関係者のAD登録、必要機材・素材の確認と準備、進行の段取りの確認） <p>【実施当日】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題：天候、参加者の動向等への対応を事前に想定しておくこと（おもてなし全般）、急な業務の増減・支援依頼への対応を想定しておくこと、業務のバラツキ・仕事量の確保（学生の業務） 		

¹⁵ 本稿で取り上げたような学習方法を運営・実践するにあたって、約1年前から準備が始まることから、担当する教員の負担をいかに軽減していくかといった問題や、事前準備をいかに綿密かつ丁寧に行っていくかは大いに問題であると思われる。実際、準備不足が実施当日に様々な問題となって噴出した。特に、天候の急変や活動予定の周知（宣伝）に関する事、企画への参加者（選手・スタッフ）がいなかった際の代替活動を事前に想定しておくことに関する課題が、参加した学生たちから指摘があった。指導計画を入念に作成することが、本学習形式では特に求められると思われる。

参考文献

- 江田英里香、船木伸江、前林清和、2003、「大学生のスポーツボランティアに対する意識と実態についての調査研究」、『身体運動文化論攷』2、61-78.
- 福山正和、2002、「学生時代のボランティア経験がその後のボランティア活動に及ぼす影響に関する研究：キャンプボランティアの満足度と卒業後のボランティア活動の参加動機に着目して」、『大阪体育大学紀要』33、91-93.
- 伊藤恵造、2016、「教員養成学部における『体育理論』領域に関連した授業実践の再検討—『スポーツと地域活性化』をテーマとして—」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』38、27-40.
- 上条典夫、2002、『スポーツ経済効果で元気になった街と国』、講談社+α 新書.
- 金森雅夫・黒澤毅・高橋佳三、2012、「アカデミックアワー研究報告 学生スポーツボランティアのシステム構築と活動支援」、『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』9、145-148.
- 金崎良三、2005、「スポーツ・ボランティア研究(1)：大学生のスポーツ・ボランティア活動についての意識と実態」、『佐賀大学文化教育学部研究論文集』9(2)、201-212.
- 北島信哉、2016「東京五輪・パラリンピックに向けた大学連携事業に関する事例研究」、『スポーツ産業学研究』26 (1)、183-189.
- 窪田誠志・真栄城勉・慶田花英太・高良義樹・上間達也・重見有香・備瀬みずの・島袋桂・上間浩樹・嘉手苺佑也・知花さやか、2009「学生スポーツ・ボランティア実践事例—RSLCの5年間の活動を振り返り—」、『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』(16)、55-65.
- 松下雅雄、2005、「事例紹介 学生のスポーツボランティア活動の支援事業—スポーツの実践的指導力を持った学生を“地域とともに”育て、地域のスポーツ活動を活性化する—」、『大学と学生』18、32-36.
- 松谷満、青山鉄兵、田村和寿、2010、「大学生のボランティア意識とサービス・ラーニングの効果—桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部の取り組みから—」、『桐蔭論叢』22、103-114.
- 原田宗彦、2002、『スポーツイベントの経済学—メガイメントとホームチームが都市を変える』、平凡社新書.
- 内藤正和、2007「大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研究」、『愛知学院大学心身科学部紀要』第3号、21-29.
- 日本政策投資銀行、2016、「2017 冬季アジア大会による北海道内への経済波及効果」.
- 二宮雅也、2016、「ボランティア化する社会と身体—大学生を取り巻くボランティアの状況」、山本敦久編『身体と教養：身体と向き合うアクティブ・ラーニングの探求』、85-99、ナカニシヤ出版.
- 二宮雅也、2017、「スポーツボランティアとは？—スポーツの『裏方』を楽しむ—」、清水諭編、『現代スポーツ評論』37、44-55.
- 岡崎敏朗、2015、「教育学部の学生が総合型知育スポーツクラブで活動する意義：学生

- 時代こそボランティアで実践力を学ぶべき」、『健康レクリエーション研究』11、63-66.
- 大西史晃・松田保・金森雅夫・的地修・豊田則成・廣木武士、2010、「学生の頃ボランティア活動による地域貢献」、『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』7、105-115.
- 大竹智、2005、「第4回全国障害者スポーツ大会学生ボランティア『まごころパートナー』養成の取り組み」、『立正大学社会福祉研究所年報』7、75-110.
- 高見栄喜、小枝英輝、岡英世、2008、「障害者スポーツイベントにおける学生ボランティアの満足度に関する研究」、『関西総合リハビリテーション専門学校紀要』1、5-10.
- 常浦光希、田原陽介、山本孔一、2016、「スポーツボランティアにおける学習成果の仮設モデルの生成：Jリーグのボランティアを経験した大学生に着目して」、『環太平洋大学研究紀要』10、211-216.
- 豊田則成・金森雅夫、2007「スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは？—びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の『語り』から—」、『びわ湖成蹊スポーツ大学研究紀要』第4号、9-18.
- 植木章三、2007、「大学における障害者スポーツ関連教育と地域貢献との融合—“パロリンピック”の企画・運営を通じて—」、『障害者スポーツ科学』5(1)、72-75.
- 山下博武・行實鉄平、2015、「徳島ボルティスにおける運営ボランティア参加学生の意識変容プロセス」、『体育・スポーツ経営学研究』28(1)、33-51.

(受付：2018年9月3日，受理：2018年11月7日)